

「沖縄の若者たち」

2019年05月18日

岩波の月刊誌『世界』の6月号に、ノンフィクション作家の辰濃哲郎氏が「沖縄の新しいねり 本土に向けて若者たちの『乞食行進』」と題して、沖縄の若者たちの言動報告を寄稿している。沖縄で政治に参加することは苦しいことである。身内に米軍関係者がいれば、基地問題の発言を控える。外からもたらされた問題によって、県民の心が分断される。一度関わったら、様々な葛藤に悩まされ、出口の見えない迷路にはまり込む。また、いくら闘っても国に無視され続ける。政治に関わることはつらいことで、無関心である方が楽である。若者たちには、更に、政治からはじき出される状況がある。若い世代は沖縄戦から本土復帰に至るまでの苦難の歴史を知らない。沖縄県民の声をあげているのはシニア世代が中心であるが、「歴史的な知識が足りない。考えが甘い」と揶揄される。知識は勉強すれば追いつくが、苦難の歴史を体験したシニア世代との軋轢は根深いものがある。

ところが、最近の沖縄の若者たちは盛んに発言し、行動するようになった。シニア世代たちも彼らに近寄る状況が生まれて来た。昨年9月の沖縄県知事選は、翁長雄志前知事の後継者となる玉城デニー候補と安倍政権の推す佐喜眞淳候補の一騎打ちとなった。この選挙では、翁長前知事の「ウチナーンチュ、ウシェーティナイビランドー」という言葉が、強力に後押しした。「沖縄をないがしろにしていけませんよ」と説明された方言であるが、年配のウチナーンチュに尋ねると、生易しい言葉でなく「沖縄を舐めんなよ」という響きであると言う。「沖縄を舐めんなよ」「イデオロギーよりアイデンティティ」「オール沖縄」で闘った。支持メンバーの若者たちも玉城支持に向かつてはフル回転し、39万票を獲得して当選を果たした。

沖縄では、辺野古新基地建設に関する県民投票が2月24日に行われた。この県民投票を実施するためには、まず、有権者の50分の1に相当する2万3千筆の署名集めをしなければならない。若者たちは署名活動に参加し、政党や労組、シニア世代も触発されて動き始め、5倍近い、10万筆を超える署名を集め、県民投票を可能にした。県民投票は「賛成」「反対」の二択になっていた。二択では民意を図りかねると、沖縄市や宜野湾市などの五市の市長が不参加を表明した。36万人が投票できないことになる。28歳の元山仁士郎氏が、県民投票を訴え、ハンガーストライキを言い出した。ハンストは自分に対する暴力で、それを手段にすることは非暴力運動とは言えないのではないかという意見もあったが、元山氏は他に方法がないと、宜野湾市役所前でハンストに入った。若者にここまでさせてという思いと、投票権を奪われる理不尽さが県民を動かしていった。元山氏を支える多くの人々が現れたが、一方、街宣車が高音で攻撃する右翼にも晒された。公明党の県議会議員がハンストをして訴える元山氏に感動し、「賛成」「反対」「どちらでもない」の3択の妥協案を提示してきた。全県で3択案を受け入れ、県民投票が実施されることになった。元山氏のハンストは105時間に及んだが、ドクターストップがかかり終了した。政党や労組などのイデオロギーとは無縁の県民運動が展開されたのである。

私は、辺野古新基地建設に関して、県民投票をすることは問題があるのではないかと考えていた。今まで再三、選挙において、県民の建設反対の意志表示はなされてきた。基地問題だけで投票が求められると、もう十分意思表示はしてきたと思う人々は投票に行かないのではないかと思ったからである。ところが若者たちから、本島南部の糸満市から北部の名護市・辺野古までの約80キロを、2日間かけて投票を呼び掛けながら歩く行進をしようという企画が持ち上がった。翁長前知事の次男の雄治氏（31歳）の事務所に集まり、計

画を練った。戦後 50 年に当たる 1995 年に平和祈念公園内に、24 万人あまりの戦死者の名が刻まれた「平和の礎」から出発しようと言いだしたが、戦後、住民たちが拾い集めた遺骨を吊った「魂魄の塔」の方が県民には親しみがあると、「魂魄の塔」から「辺野古」までという道のりが決まった。すかさず「乞食行進だね」と呼応した。「乞食行進」とは、離島の伊江島で米軍が農民を家から追い出して、ブルドーザーで家屋をなぎ倒し、基地を建設した時、糸満から国頭まで、米軍の無謀な土地収奪に対する抗議の行進に名付けたものである。反基地の「島ぐるみ闘争」の先駆けとなった運動である。その指導者が、沖縄のガンジーと言われた阿波根昌鴻氏である。阿波根氏は『命は宝』を著し、「ヌチドゥタカラの家」を建設し、平和運動を展開されてきた。私は、伊江島で「ヌチドゥタカラの家」を見学し、阿波根氏の迫力ある講演を聞いた。彼が土地闘争のために作った「陳情規定」という申し合わせがある。それは、反米的にならないこと、怒ったり、悪口を言ったりしないこと、会談の時は必ず座ること、モッコ、鎌、棒切れ、その他を手には持たないこと、耳より上に手を上げないこと、破壊者である軍人を教え導く心構えが大切であることなど、徹底した非暴力主義であった。彼らが行った「乞食行進」に、若者たちは自分たちが行う行進をなぞらえ、先人の知恵と行動を学び、倣った訳である。「魂魄の塔」を出発し、「辺野古」まで、足を痛めながら歩き通した。その間、シニアから、おにぎり、バナナ、水などの差し入れを受けた。若者たちの「乞食行進」は大きな賛意を受けたのである。県民投票は投票率が 52.48%、基地反対が 434,591 票で 72.2%、玉城氏の得票数を 4 万票も上回っている。

辰濃氏は、若者たちの行動は「本土に向けて問う若者たちの『乞食行進』」であると捉え、最後に下記のように書いている。「『歴史を知らない』と揶揄される若者たちが、苦難の歴史に思いを馳せてウチナンチュとしての誇り、いわばアイデンティティを具現化する試みだった。そこにシニア世代が加わって心から応援を寄せたことに、世代間の分断を乗り越える糸口を見出したのは、私だけではないはずだ。翁長が遺した『アイデンティティ』の言葉の向こうにある、本当にものを言うべき相手、が見えてきた。」

琉球大学の大学院生の新垣優奈さん（23 歳、仮名）のフェイスブックにアップされた散文が書かれていたので転載したい。

「私は沖縄で生まれて、沖縄で育ってきた。この島で生きる人たちはとっても優しく、とってもあたたかくて、とっても強い。（中略）どんなにその思いが踏みにじられようとも／歯を食いしばって闘ってきた。どれだけの人が沖縄のために／自分ではない誰かのために／たくさんの涙を流してきたのだろう。どうしてこの思いが届かないんだろう。くやしなくて／かなしくて／たまらない。優しさで溢れるこの島で／誰も望んでいないのに／どうして外からやってきたものによって／対立させられなきゃいけないんだろう。わかっているはず、対立なんて誰も望んでいないこと。誰かを傷つけたくて／傷つけている人なんていないこと。誰かを傷つけることで／自分も傷ついていること。ただしあわせになりたいだけ。私たちはすでに／平和をつくるための知恵だって術だって／ちゃんと持っているはず。（中略）もう誰かが傷ついているのをみたくない。ただそれだけ。」

私は、九条を守って平和を求め、原発を廃し、沖縄県民と連帯したいとの思いで、小さな市民運動に加わっている。これは、主イエスが全ての人を義とした救い、即ち、人間の尊厳を「福音」として現わしたことに、応えたい思いからである。自分よがりなイデオロギーでない新垣さんの散文に全く同感し、感動を覚える。